

演題番号：C8

リンパ腫が舌に発生した猫の1例

○辻本恭典, 長澤俊範, 小西 翔, 小嵐圭祐, 星合里香, 栢割有伽, 藤本 優, 細川将史,
川端千晶, 山田優樹

和泉動物病院

1. はじめに：リンパ腫は猫で多く発生する悪性腫瘍であり、その部位により治療法および予後が異なる。今回、口臭を主訴に来院し、のちに舌のリンパ腫と診断した1症例について、その概要を検討した。

2. 材料と方法：症例は雑種猫、避妊済み、年齢不詳。口臭を主訴に来院し、歯石除去による口腔内治療を提案した。術前検査にて、血液検査で好中球増多症(16300/ μ l)、血液化学検査にて興奮性を疑う高血糖(190 mg/dl)を認めた。胸部レントゲン検査では、異常は認められなかった。第8病日、歯石除去処置における気管挿管の際、舌根正中に表層の一部が壊死した直径約10 mmの充実性結節を認めた。結節はメスにて切除生検し、病理組織検査に提出した。切除部位からの出血はほとんど認められなかった。また、後日に行った腹部超音波検査においても異常は認められなかった。

3. 結果：病理組織検査の結果は高悪性度リンパ腫であった。解剖学的分類において舌は消化器に含まれるため、高悪性度消化器型リンパ腫と診断した。第15病日から治療としてL-CHOPベースの多剤併用化学療法(変更型UW-25)を実施した。初回のビンクリスチン投与後に食欲低下を認めた以外

は大きな副反応は認められなかった。第231病日に鎮静下にて口腔内を精査したところ、結節が存在した領域は癒痕化しており、スタンプ検査ではリンパ腫を疑う細胞は認められなかった。これらの結果より、寛解と判断し、化学療法は終了とした。以降、1か月ごとに無鎮静下での口腔内検査および血液検査を行い、第884病日に自宅で斃死するまで口腔内にリンパ腫の再燃を疑う病変は確認されなかった。

4. 考察および結語：リンパ腫が口腔内に発生することは稀である。また、リンパ腫が舌に発生した猫の報告は1例しかなく、治療反応や予後についての詳細は不明である。一方で、胃腸管に発生する消化器型リンパ腫は猫で多く報告されており、多剤併用化学療法を行った場合の高悪性度消化器型リンパ腫の生存期間中央値は約80日程度と報告されている。本症例は654日といった長期にわたり寛解を維持できており、舌に発生したリンパ腫は、胃腸管に発生する高悪性度リンパ腫と比較して挙動および化学療法への反応性が異なる可能性が示唆された。今後、症例が蓄積され、舌に発生するリンパ腫の予後について詳細が明らかになることが望まれる。